

こう水からまちを守る わたしたちのまち越谷では…



ここは学校のように、水があふれているね。



越谷市には、今まで学習したように、元荒川や古利根川などの川や葛西用水や末田大用水などの用水路がたくさんあります。ふだんは農業などに利用されている水も、大きな台風が来るとこう水を起こし、人々に大きなひがいをあたえてきました。

特に1947年の台風では、越谷市だけではなく、近くの市町村や、東京都にまでひがいがでました。上の写真は、1982年の台風のときの県立越谷東高等学校の様子です。このときも、約7500軒の家が水につかりました。

こうした水をふせぐために、国の協力をもらい、川を広げたり、流れを変えたりする工事がすすめられました。それらの工事といっしょに川の水の量がふえたときのために、水を一時的にためる調節池をつくりました。

1999年には、河川防災ステーションをそなえた新方地区センター・公民館ができたね。



新方地区センター・公民館



大相模調節池と越谷レイクタウン

2008年には、大吉調節池の3倍のちょ水量がある大相模調節池ができ、それを中心にして「越谷レイクタウン」がまち開きしました。

また、市内の電柱には『想定浸水深』のかん板が設置されています。かん板には地いきで災害が起きたとき、どのくらい浸水するのかがわかるように、青テープでしめされています。右の写真をみると、子どもの背より高い位置まで水がくると考えられています。

赤テープは利根川で災害が起きたときに浸水する位置です。

このように越谷市では、ふだんからこう水に対するそなえをするように、こう水ハザードマップをつくりよびかけています。今もこう水からまちを守る取り組みは続けられています。

じつは、多くの学校の校庭も調節池のように、雨をためることができるようになっています。自分の学校はどうなっているのか調べてみましょう。



水があるときの校庭



水がないときの校庭



想定浸水深のかん板



想定浸水深の表示がある電柱

